

湘桂撤退作戦

孤軍第四中隊の苦闘

千葉県 星野七郎

大湾より柳州へ

六月中旬、第四中隊は部隊主力と別れ、大湾より柳州に向け、兵糧・彈薬その他の輸送を命ぜられた。牛車を徵発し、苦力隊を伴って、午前三時頃大湾を出発、隱密裡に暗夜を撤収す。徵発せる牛車六台に、梱包その他を満載して、中隊の最後尾を進む。この牛車は資材不足で、肝心の心棒が整備不完全で、絶えず鋭い高音を発し、静まり返った夜空をふるわせた。我々の行動を敵側が察知したならばと、逸る気持ちを静めながら、祈る思いの前進だった。辛なるかな、微かに吹く追い風が我に幸いして、敵の追撃から逃れることができたのである。苦心慘憺調達したこの牛車も、柳州到着以前にすべて破損して、使用不能となり放棄し

てしまった。

この際、兵团命令によると、「小屋迫部隊（独立歩兵第一二六大隊）の一個中隊が、後衛尖兵となり石竜を撤退するので、石竜においてこれと合流し、柳州付近に北上せよ」との事だった。周田の状況にてらしても、すこぶる危険な行動である。できる限り軽装でなければならぬ。私物を惜しげなく捨てて、励まし合って石竜へと急行した。

石竜の手前一キロの地点で、一個分隊の偵察隊を派遣し、石竜を偵察させたが、「既に部落は赤い炎に包まれ、敵の手中にあるものの如し」との報告に接す。

これより第四中隊は、小屋迫の後衛が撤退せりとおぼしき道路を事実上の最後尾となり、悲壯な敵中突破を敢行、柳州目指して北上した。

敵の真只中、しかも遅々として進まぬ牛車部隊を引き連れての決死行である。中隊全員最悪の事態を予想し、身も氷る緊張の連続だった。余儀なく行路を変更、石牌方向に進路をとり、左右丘陵地帯の連なる谷間の畑中の路上を北上した。途中全く友軍の姿を見

ず、所々に、彼我の戦死者が道路上に横たわり、時折左右の山岳地帯より銃声が聞こえる無気味さである。後衛撤退の際の犠牲者であろう。

頃は初夏であるが、夜になると至る所の草むらで奇妙にすだく虫の鳴く声は、はかなく散った戦死者の霊を吊っているかのように悲愁をこめていた。道路に横たわる友軍の英霊を側溝に引き入れ、円匙で穴を掘り形ばかりの埋葬をし、黙禱を捧げ冥福を祈る。

昼夜を分かたぬ行軍を続け、幸運にも敵と交戦することなく、数日の後、柳州付近に到達することができた。大湾から柳州に至る前進経路について、諸説はあれど、途中友軍と遭遇せぬところから考えて、地図に記載されない道路を通過したと思われる。

柳州に達し、兵团司令部に合流、その夜は付近の薄暗い洞窟に一夜を明かす。翌朝、兵团命令により、我が独立歩兵第六十六大隊主力救援のため春日中隊長は、柳州東南方に広がる丘陵地帯より主力が死闘を繰り広げている大鳥山、羅漢山を目指して、敵警戒線を

突破し、主力に接近せんと決意し、再び前進を始めた。

柳州の市街はここより北方した付近にあると聞いたが現在地からは全く望めなかった。軍事施設と思われる木造の二階建てや平屋が諸所に点在しているが、人影は認められず、荒涼としていた。敵戦闘機の残骸が二機、折り重なるように醜い姿を晒している。

柳州飛行場の外周を左に迂回し、やがて樹立に囲まれた小部落を発見、日没までこの地点に待機し、前方丘陵地帯辺りの敵状地形を偵察す。因みに本部落は水壺かはたまた喇堡か定かならず。

夕闇迫る頃、部落を進発、尚も南に指向、丘陵地帯に侵入した。一つ台地を越えて、次の台地に取り付いた時、突如前方頂上付近より猛烈なる射撃を受け、その場に散開、応戦す。敵兵力、配備、地形等不明であり、猪突すべきにあらずと判断した隊長は、すぐさま兵を纏めて、後退、再び柳州に反転した。

炊飯もそこそこに出発準備を整える。ここにおいて新たな命令を受く。「春日隊は急遽新興に至り、田賀

部隊の一個中隊を收容したるのち、独立歩兵第六十六大隊主力救援のため急行せよ」とある。

中隊は直ちに行動をおこし、柳州公路を反転、深夜の強行軍により、未明近く四方墟に至る。ここにおいて弱兵、急病人をトラックにて柳州に送り、更に新興に至る。兵糧、彈藥受領及び連絡のためトラックにて先行せし宇野曹長と合流す。敵は既に田賀部隊警備地域内に潜入し、状況はすこぶる切迫したるものあり。

田賀部隊本部にて兵糧・彈藥を受領したる後、再び田賀部隊最前線の小哨・穿山墟に至り、小島中隊（一個小隊欠）を收容、小休止の後、夕刻我が中隊は小島大尉指揮のもとに穿山墟を出発、決死の救援に赴く。

小島隊の一個小隊は尖兵となり、山間の隘路を敵の真只中に侵入した。果たせるかな、前方台地より、猛烈なる射撃を受け、尖兵は直ちに応戦、軽機射手二人を失うも、激闘の末これを撃退し、更に前進を続行した。本行動の間、永井軍医の同行は意を強くするものがあった。その後も小島隊と密接な連繫をとり、夜露に濡れた山あいの細道を肅々と前進する。

中隊の將兵は丸三日不眠不休の強行軍に、既に体力の限界を越す悲惨なものだった。彈藥・糧食を担夫に背負わせ、兵がこれを包むように前進する。山は益々深さを増し、所々に畑が点在する。やがて夜も明けようとする頃、小島中隊長は、多田軍曹以下六人を右側の台地に警戒兵として残置し、以後の行動に移る作戦であった。

正面の台地に白っぽい建物がぼんやりと見える、百朋街の部落でないかと、見る者すべてが思った（この部落は百朋街ではなかった）。夜明けを迎えるのだ。東の空が漸く白んでくる。辺りの景色を乳白色の幕が、うっすらと包んでいた。

隊長は直ちに密偵に部落偵察を命じた。密偵の報告待ちで、小隊別に散開、待機するよう命令した。部落には一筋の煙も立たず、無気味な程静まり返っていた。恐らく部落民は、いち早く逃走したのではと考えられる。中隊は部落を急襲した後、そこで朝食を取ることを予定していた。

道路に添った墓地の辺りに、敵側のとと思われる電話

線が架設されてあるのを、MG（機関銃）小隊の青野兵長が発見し、山崎小隊長に報告、近くに敵陣地があるのを感じた。早急に四囲を警戒するように、各小隊に伝達、電話線をナイフで切断した。密偵の報告は、予期していた通り「見張りの老婆の他一人も居ない。これは怪しい」であった。

中隊長は直ちに、各小隊に部署につくことを命じた。山崎隊は中央最前列部隊の全面で進出、早野隊は左翼台地、武藤隊は右翼に、中央山崎隊の後方に指揮班、松本軍曹の重機一個分隊を率いて指揮班に同行、星野軍曹の指揮する一銃は後方墓地付近に待機と下達した。

田賀部隊小島隊は、第四中隊より更に前方に進出していた。山崎隊は指令の台地に前進、確保せんとした時、全面の部落後方付近より、突如一斉射撃を浴びた。同時に左側高地、右側前方台地よりも攻撃を受ける。正に十字砲火の洗礼である。あまつさえ、後方待機していた星野分隊の頭上より予期もなかった手榴弾の直下攻撃だ。

完全包囲の形であり、事態は最悪である。頭上より投下する手榴弾は、五十メートルの高所より落下するため、ほとんど空中炸裂で物凄い音響ばかりで、さしたる損害はなかったが、狂った如く三方から浴びせかける銃弾は雨霰のように前後左右に突き刺さる。少しでも動けばたちまち集中射撃を見舞われる。

敵は地形の良い山頂から攻撃する有利を持ち、我方は山間の平地に在り、遮蔽する何物もない。しかも我に数倍する兵力と見た。地面にイモリの如くベッタリ身を伏せたまま身動きひとつできない。後方のMG分隊は、避難場所を墓地に求め敵弾を逃れる。時折、霧が低く流れて我々を包んでくれる。その都度、素早く位置を移動する。かくてはならじと、中隊長は、全將兵に射撃を命ず。味方のあらゆる火器が一斉に火を吹く。

彼我の銃声と手榴弾の炸裂する音が、静かなるべきこの山間をたちまちのうちに叫喚の坩堝と化し、壮絶極まる修羅場を現出した。

武藤隊の位置にも銃弾が、容赦なく撃ち込まれ、ま

ず日暮上等兵が頭部を撃ち抜かれて重傷を負ってしまつた。続いて石崎兵長も胸と腹に二弾を受け壮烈なる戦死を遂げ、吉田彰吾兵長も胸部貫通の重傷を受ける。このままでは第二小隊は全滅するのではないかという切迫した状態だつた。軍医・衛生兵も、自己の地点から一歩も動く事は不可能だつた。負傷者のうめき声をきいても、如何ともなす術がない。MG小隊にも犠牲者が続出した。

手榴弾の攻撃で駄馬二頭があえなく戦死、続いて福井梅太郎兵長、戸村和泉兵長が、壮絶極まる最期を遂げた。最後に残つた一頭の駄馬も恐怖におののいて鞍をつけたまま疾走して行方不明となつてしまつた。

山崎隊は目標の陣地を確保、壮絶な撃ち合いを演じていた。第四分隊・板倉鉄次郎上等兵は果敢に攻撃していたが、無念敵弾を頭部に受け、これまた壮烈なる戦死を遂げたのである。

担夫の大半も哀れ敵弾の餌食となつてしまつた。戦闘は夕刻まで続いた。日没と共に敵の射撃も緩慢となり、やがて先程までの激闘が嘘だつたような静けさを

とり戻した。

各小隊ごとに戦死者を丁重に葬り、花・線香を捧げることもできず、ひたすら冥福を祈るのみだつた。負傷者は軍医、衛生兵の手によって応急手当を施し、駄馬に積んであつた弾薬は持てる限りを各人の雑囊に納め、その他はすべて破棄処分にした。亡き戦友の墓碑に対して涙をはなむけとして、最後の決別をする。

長い一日だつた、ギラギラ焼け付く太陽に苛まれ、飢えと渇きに耐え、生と死の接点に、みなよく善戦した。しかれども、第四中隊及び小島隊には、独歩第六十六大隊主力の救援という、重大な任務が残されているのだ、如何なる犠牲を払おうとも、更に敵中深く突入して、その包囲網を突破しなくてはならない。

午後八時、中隊長は、早野小隊長を招いて速やかに第三中隊と連絡をとる事を命令した。早野准尉は直ちに、岩崎軍曹、高品兵長、登坂上等兵、川口ロッパバの四人を選抜し、みづからこれを率いて丘陵地帯を降り、隠密行動により、前面の部落を避け、田圃の畦道

を千メートル程前進し、包囲下にある第三中隊の正面
と思考される地点に向かつて、集合ラッパを吹奏、統
いて全員で「オーイ！ オーイ！」と、二回絶叫し
た。

一瞬、耳を澄ます。微かな声が返って来た。山彦
か、いや山彦にあらず、すぐさま、連絡隊は中隊本部
の位置に引き返し、中隊長に状況を報告した。しかし
実際は、微かに耳にした声は、第三中隊のものでな
く、田賀部隊（独歩第一二五大隊）の小島隊収容のた
めの連絡下士、二人のものだった。

折から幸運にも降り出した篠突く豪雨を利して、敵
中を突破、ようやく死地を脱出することができた。翌
朝、友軍と羅漢山麓で合流したのである。

昨朝、小島隊より出された多田軍曹以下六人の警戒
兵は、撤収不能に陥り山頂に孤立、敵重囲下、弾薬の
すべてを撃ち尽くし、最後に手榴弾にて全員自爆、壮
烈極まる戦死を遂げたのである。

独立歩兵第六十六大隊は、豪雨降りしきる中、闇夜

を利して辛うじて柳州方面へ脱出に成功した。兵团主
力は、既に柳桂公路を北上中にして、我が部隊は、追
及部隊を収容、柳江を渡河し、兵团主力に迫及したの
である。第四中隊は事実上の最後尾となり、夕闇迫る
柳江渡河点に集結、柳江南岸より対岸三門江に、筏に
て無事渡河を完了。直ちに渡河施設を破壊。敵の追撃
を一応断ち切ることに成功した。

本戦闘における我が方の損害、戦死十五人、負傷七
人、馬三匹の尊い犠牲を出す。敵側にも相当多数の戦
死傷ありと判断するも、確認することができなかつ
た。

この撤退作戦で敵の重囲に陥り、犠牲者が続出し、
脱出困難なりと絶望視されていた我が独立歩兵第六十
六大隊の処置について、兵团司令部幹部部将校の大部分
は、たとえ第六十六大隊一個大隊は玉碎せしめると
も、兵团は速やかに他の大隊を収容し撤退すべきであ
る、との意見が強かったが、新村高級参謀は、たとえ
節兵团が全滅するとも独歩第六十六大隊を見殺しには
できない。絶対に救出すべきであると自説を曲げず、

頑として主張した。米山兵団長も、同参謀の熱血溢れる意見を諒として、救出すべしとの命令を下したのである。

この作戦では、各中隊共、多くの尊い犠牲者を出したが、その偉勲は上聞に達し、兵団長からも賞詞を受けた。

「一将功なりて 万骨枯る」であってはならないと思つた。